

## 進路選択の一事例

法学部 両角 吉晃

法学部でイスラーム法の研究をしている両角と申します。

私がどのように進路を決めたかという話は、専門がマイナーであるという観点からすると、あまり役に立たないかもしれません。しかし、そういうケースだからこそ見えてくることもあると思います、学生の皆さんに私の経験についてお話しすることにします。

### ・私はどのようにして進路を決めたか

大学に入学した段階で考えていたのは官僚になることで、文科一類を選んだのもそのためでした。しかし、1年生の時、演習で読んだ文献の中に「イスラーム法」という言葉が出てきたのがきっかけで、イスラーム法に関心を持ちました。

元々中東の歴史が好きで、トルコ語をかじったりしていましたし、また、大学の授業で学問研究の面白さに触れた結果、研究者になってイスラーム法の研究をするという選択肢が、少なくとも自分にとっては、現実的なものとなってきました。重要な分野なのでやってみる価値はあると勧めて下さる先生もおられ、大いに勇気づけられました。さらに、当時の法学部にはイスラーム法の専門家がいなかったのですが、成績要件を満たせば助教（当時は助手）に採用してもらえることになり、少なくとも最初の段階では経済的に自活できそうな見通しも立ちました。

学部卒業後、無事に法学部の助教に採用され、さらにその後も専任講師、助教授と職歴をつなげることができました。これは周囲の先生方のご配慮によるところが大きく、その点で私は幸運だったと思います。

### ・進路を選択することの意味

今にして思うと、この進路選択がよく考えた上でのものであったかといえ、おそらく、そうではな

かった、と答えざるを得ません。実際、あまりにマイナーな専攻ゆえ、将来を心配した親からは反対されましたし、また、法学部の先生に、「10年間、定職には就けないものと思って下さい」と言われたこともありましたが、それにもかかわらず、「何とかなるだろう」というあまり根拠のない楽観的見通しに基づいて、その進路を進むことになりました。幸いにも、上記の通り、職歴が途切れることはありませんでしたが、時間が経つにつれ、私の選択について年長者が表明した懸念の中には確かに当たっているものがある、ということを実感するようになりました。進路を選択した時点では、人生についてわかっていないことが多々あった、というのは否定できない事実であるように思います。ただし、これはあくまでも後付けの観察でしかありません。

若気の至りという言葉がありますが、これには積極的な意味があると考えられます。人間の思春期における生物学的な変化には、危険を顧みず新しいことに挑戦するのを促す機能があるそうですが、ある程度の無謀さがあるからこそ、いろいろなことにチャレンジする意欲が出てくるのは確かなことと思われれます。あくまでも仮定の話ですが、もし、これまでの経験を基に改めて進路選択をする機会が私に与えられたならば、おそらく選択の内容自体は変わらないと思いますが、いろいろな点について考え、迷った上での選択になるでしょう。

選択に当たって「よく考える」ことは必要ですが、考えを尽くすということが不可能である以上、最終的には、自分がやってみたいと思うことをやる、という選択がベストだと思います。選択は、自分が、自分のために、自分の考えに基づいて行うものであり、客観的な正解があったり、お手本があったりするわけではないのです。

なお、重要なことなので付言しますと、以上のことは、もちろん、現実面での心配をしなくてもよい、ということではありません。進路選択が生活（特にその経済的な側面）に及ぼす影響は非常に大きいので、この点に関する考慮は絶対に必要です。

ただ、どのような選択をするにしても、将来、選んだ進路を進む中で様々な困難に遭遇することはまず間違いなく、その時、困難を乗り越えるためにどれだけの力を出せるかは、何を基準にして選択を行ったかによって決まってくるという面があるよう

に思います。自分の置かれている状況が、自分が行った自由な選択の結果である、という意識を持てるからこそ、それに立ち向かう力をなくさずにいることができるのです。

もちろん、生きていく中で遭遇するすべての困難が自らの選択の結果であるとは限りません。人間の人生は自らのコントロールできない事情によっても大きく変わってくるものです。しかし、おそらく、進路選択の場面で自由な選択をした—その意味で自分は他律的でない生き方をしている—という意識を持っている場合には、このような外在的な要因に基づいて降りかかってくる困難にも積極的に立ち向かうことができるように思います。重要な部分で自分の人生を決めているのは自分だ、と信じることができるからです。

自分が思うような選択をした結果、それがうまくいかず、やり直しが必要になる場合もあるでしょう。しかし、社会全体の変化のおかげで、以前に比べると、やり直しをすることに対する違和感は少なくなっています。また、近年、この道を通っていけば将来的にもまず安全だ、という保証が以前に比べても成り立ちにくくなっている、という現状があります（人間が未来を完全に見通す力を持っていない以上、そのようなものは、そもそも存在しないとも言えますが）。そうであるとするれば、選択に当たっての考慮事項としては、確実・安心であるということよりも、自らの意欲の方を重視すべきだということになるでしょう。

何をしたいのかという点自体がはっきりわからないことも多いわけですが、今の皆さんには、様々な可能性が開かれているという素晴らしい状況の中で、自分の希望について突き詰めて考える自由があります。そして、大学での学問は、その可能性を広げるものでもあるはずですが。これは、資格試験に通るための勉強をするというような狭い意味での話ではなく、人間がより自由になるための場としての機能を大学が持っているということです（資格試験のための勉強は重要ではないと言っているわけではありません、念のため）。

この点に関連して一つ申しますと、日本社会において、女性にとって自由な進路選択の幅が広がりつつあることは、大変喜ばしいことだと思っています。ただし、改善を必要とする領域がまだまだたくさん残っ

ていることも確かです。女性にとって自由な選択の幅が広がるということは、実は、男性にとっても同じ意味を持ちます。東京大学においても、より多くの女性研究者が誕生し、活躍することができるよう、大学が積極的に女性を支援する施策を採用・拡充しています。先進諸国と同じように、多くの女性研究者が大学で活躍できる時代が来ることを期待しています。

## ・自由と責任

突然話が変わるようで恐縮ですが、現代の刑法では、犯罪行為を行った人に対してその責任を問うことができるのは、適法な行為を行うことが期待できる状態にあったということが条件になります。つまり、適法な行為を行う自由があったのに、それを選択せず、犯罪行為を選択したために、その選択の責任を問われる、という構造になっています。

これは何も近代に特有の考え方ではありません。もし神が人間の運命をすべて決めておくとすれば、人間の側には行動を選択する余地がなく、そうだとすると、悪行に対する罰として地獄に落ちる人間が出てくるのはどうしてなのか（もし悪行が神の決めた運命であるならば、人間がその責任を問われるのはどうしてなのか）、という問題意識は、キリスト教にもイスラームにも存在していました。

つまり、選択の自由がないところには責任もない、ということになります。そして、自分の人生の責任を他人に押しつけることができず、自らその責任を負わなくてはならない以上、選択は自由に行われなくてはなりません。もちろん、人は様々ななかみの中で生きていますので、完全に自由な選択というものがそもそも可能かという疑問は提起しようでしょう。しかし、より自由な条件の下で選択を行うことの重要性に変わりはありません。

多くの皆さんにとって、進路選択は、人生における最大の選択の一つであり、かつ、その最初のものである、ということになるでしょう。皆さんが、真の意味で自分の人生を生きるために、自由な進路選択を行うことを祈っています。